

暗殺の壁画

石原慎太郎



暗殺の壁画
SHINTARŌ ISHIHARA
石原慎太郎

河出書房新社

暗殺の壁画

一九八四年七月二十日 初版印刷
一九八四年七月二十五日 初版発行

著者 石原慎太郎

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十二
振替口座(東京)〇一〇八〇二
電話(東京)四〇四一二〇一(営業)
四〇四一八六一(編集)

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 小高製本工業株式会社

暗殺の壁面

裴頠
菊地信義

一九八三年 夏

どうにも不便だという家内との口論の末、その夏、ようやく電話を取り付けた山小屋へ、翌る日曜日、午睡を破ってかかってきた電話は、皮肉なことに留守宅からだった。昼前、念のため電話番号は伝えたが、もちろん周りには教えず、減多なことがない限りかけてくるなど言わせて、切ったばかりだった。同じ高原に來ている仲間からの、夕方から半ラウンドを廻るゴルフの時間の確認かと思つてとつたが、留守宅に來たばかりの家政婦が、緊張した声で私を確めた。

「たつた今、M市におられる大宮様から国際電話が入りましたが、お留守と伝えましたら、連絡して大至急向こうへかけてくれるようにとのことでした」

番号を告げた後、

「共同通信の事務所だそうです」

「至急と言つたんだな」

「大至急と」

「何か急な用だと言っていたかね」

「はい。アル、バ、アルバ様が、向こうにお着きになってすぐ、射たれて亡くなられたそうです」

手元のメモを確認ながらのようには彼女は言った。

「エディが射たれたと」

「いえ、アルバ様が」

受話器を置きながら、隣りの部屋で仕舞い物をしていた家内に私は声をかけた。

「おい、アルバがM市に着いてすぐ、撃たれて死んだそうだ。たった今、大宮から向こうに電話があった」

家内は収いかけていたものを手にしたまま飛んできたが、頷きながら私は、何故か自分の声がそんなに慌てていないのに気づいていた。たった今、国際電話で知らされた出来事は、あり得ぬながら、また充分にあり得る、信じまいとしながら、実は事の前からすでに私たちも予期していたことのような気がした。

かけ直したM市の電話は、一度目は話し中で、次を待つ間、それが事実なら、もう何を思い巡らしても詮無いことと自分に言い聞かせながら、私は次第に落着いていた。

そして、やっと出た相手の、動揺し切った声が一層私を落着かせたと思う。

「畜生、やりましたよ、奴ら、やりやがった。僕の目の前で、アルバを射ち殺しましたよ。本当にやられちゃいました。飛行機を降りたと思ったら、いきなりパンパンと、頭にまともにくらって、棒みたいになって倒れて転がって、それきりでした」

顔こそ見えないが、泣いて叫ぶような、高く引きつった声で大宮はいった。

私は逆に、限られた会話から何かを検証しようとでもするように、自分でも意外なほど落着いた声で、メモをとりながら聞き返した。

「頭をか、頭をやられたのか」

「そうです、一発、四五口径の拳銃を引き出して、あっという間です」

「君は、それを確かに見たんだな」

「何をいうんです。僕の、目の前ですよ。僕のほかにT市から一緒に来ていた、共同の植村君も見ました。目の前です。僕らが一番近いところにいたんです」

「射ったのは誰だ。それも見たんだな」

「見ましたよ。アルバを迎えに来た兵隊です。下士官が三人で、奴らがいきなり後ろから射ちやがった。奴ら、本当にアルバをやってしまったんですよ」

「それで、確かに彼は死んだのか」

「わかりません。でも、ものすごい血でした。射たれて、一歩二歩でばたーんと、膝もつかず、真っ直ぐに顔から倒れたまま動かなかった。血がだあっと流れて。至近で、頭をですからね。死

んだでしょう。奴ら、その後、あつという間に彼の体を、停めてあつた空軍の車に押しこんで、走って消えました」

「至近で、頭に一発か」

「そう、一発、いや、二発か。あのね——」

何かを思い返しながら、自分をなだめるように、

「あのね、実に変なんです」

彼はいい直した。

「アルバが射たれて倒れたら、それが合図みたいに、彼の前の車から変な男がひよろひよろと出てきてね、奴ら、その男まで射ち殺したんです。いきなり返す刀で」

「誰をだつて」

「変な、何かの制服みたいな青いシャツを着た男ですよ。そいつが急に車の蔭からひよろひよろと出てきたらね。そして、アルバを連れ去った後、かけつけた他の兵隊たちが何発も何発もそいつにぶちこんで、とどめを刺したんです」

たった今見たものを、もう一度記憶の写幕に映し直して見るように、前よりもずっと落着いた声で、ひとことひとこと自分に向って確めるように彼は話した。

「おい、君の今いったことは大事だぞ」

私も彼のまだ揺れ動いている記憶の画像を覗きこむように聞き耳をたてながら、相手をもっと

落着かせようとしていった。

「その、もう一人の男は、アルバと一緒に殺されたんだな」

「そうです」

「いや、一緒じゃない、アルバが射たれた後だったんだな」

「そうですよ。アルバが倒れたら、その瞬間、変な奴がひょろひょろと車の横から出てきたんです」

何故かその場にいかなくとも、その瞬間の人間たちの動きが目に見えるような気がした。以前、アルバのためにあの国へ出かけていった私を空港で待ち受け、飛行機の真下に停められていた軍の乗用車を私は思い出していた。

大宮は、空軍の車といった。私は聞きながら、私を迎えていた褐色の大型乗用車を、くすんだ空色に塗り変えるだけですんだ。

しかし後になって違っていたのは、その車の型だけだった。アルバを運び去ったのは、くすんだ空色の有蓋の中型トラックだった。

「君と共同の記者の他に、それを見た人間はいるのか」

「いるでしょう。でも僕らが一番間近でした。夢中で追っかけていったんですから。そうだ、僕は、写真をとりましたよ。時計も確めて見ました。アルバが射ち倒されたのは、一時二十五分です」

「写真をとった」

「とりましたよ」

「何枚くらい」

「わかりません。時計を見た後、夢中でとりました」

「君が間近で写真をとったというのを知っているものはいろのか」

「それはいるでしょう。周りに兵隊や私服が大勢いましたから」

「その後、普通に入国出来たんだな」

「出来ました。それでここにいます。この事務所、ヒルトンの中にあるんです」

互いに測り合うような沈黙があった。

「今、何か身の周りに異常はないか。そんな感じはしないか」

「ありません。でも、危いでしょうね。そうなんだ、アルバは、向こうを発つ前、もし俺の身に何かあったらお前も危いぞと言っていました」

「俺もそう思う」

「どうでしょう」

急に気負いこんだように、しかしはっきりとおびえた声で大宮は尋ねた。

「今日は日曜日だから大使館は開いていません」

「誰かいるだろうが、それより大使の公邸を探してすぐにかきこめ。俺の名前と、事後承諾をと

るから、俺が外務大臣にも断ったといつていい。様子によつたら、大使館の誰かに車で迎えに来てもらうんだ」

「わかりました」

急にひどく素直な、幼いほどの声で彼は答えた。

逃げこんだ公邸から大宮は電話し直して来、先刻と同じことを言った。前よりも私には、二度目の説明の方が混乱して聞こえた。代つて出た公使が、当人はかなり興奮してあちこちに電話をかけようとしているが、公邸の電話といえども、必ずしも安全とは言えないと思うと告げた。確かにそれを証すように、電話の間中、受話器の中に感じられる音の空間の質が二度三度変わるのを感じられた。

最後にまた代つた大宮が、

「奥さんに、アルバ夫人に、誰が教えましょう」

臆したような声で尋ねた。

「こちらでやるよ。俺が井村総領事に電話して、彼からでも伝えてもらう」

「お願いします。やっぱり僕らの誰かが教えてやりたいと思います」

「俺もそう思う。本当なら君だが、大使館の立場もあるだろうからな」

受話器を置き、私は私を見守っていた家内と向い合つた。二人はようやく眩暈を感じさせる沈

黙の中にいた。遠く離れた外国で、身近な人間に突然、非現実としか思えぬ出来事が実際に起って過ぎたのだということを、かまいたちに切り裂かれ、血を流さぬまま大きく開いた傷口を眺め直すように、二人はいつまでも見つめ合っていた。

「ポストンは、今、明け方の四時よ」

家内がいった。

私はその言葉の意味を探すように外を眺め直して見た。朝方からの雨が昼近くに上がった後、まばゆいほどの陽が射し、山鳩の鳴く赤松の木立に松籟が鳴っていた。知らされた出来事と、私が今身を置くあたりの風物は、互いに関り遠いというより、異なる位相のものにしか感じられなかった。第一ここはこんなに明るく涼しい高原の午後であり、私が声をとどかせようとしている彼方は、まだ暗黒の夜明け前だった。私の内と外との間で引き裂かれたものを接合し直し、出来事を出来事として確かにとらえ直すために、私は今ならごく自然に神の名前を口に出来そうな気がしていた。

「ここの、この電話でもポストンは呼べるな」

遠い惑星を呼ぼうとでもするように、私は家内に当り前のことを確め、家内は促すように頷いて見せた。

国際電話局が出た時、私は思い直して、手元に控えた番号の順を変え、まず井村総領事邸を呼んだ。私もやはりおびえていたと思う。

私と死者のともに良き友人だった井村総領事は、仕事柄か時ならぬ電話にも確かな声で答えて出た。

「エディが、アルバが、つい先刻M市の空港で射殺されました。案じていた通りのことが起ったわけです。大宮君が間近で見て、知らせてきました。至近から頭に射ちこまれ、棒みたいに倒れて、それきりだったそうです」

私は一気に言って、待った。

「アルバが殺されましたか」

遠い声だったが、私は人がうめく声を久しぶりに聞いた。

「いつですか」

「現地の一時二十五分、いまから二時間半前です」

二人はつい一月前交した会話を思い返しながら黙ったままでいた。

「ありがとうございます。ご丁寧」

総領事は何故か急に懇懃に礼を述べた。

「それで、あなたからニーナにそう伝えていただけますか」

「いいえ、それは——」

くぐもった声でいい淀み、

「私には出来ません。やはりあなたから、どうか」

総領事の声もおびえて感じられた。

半ば近く予知していたことに、私や彼は何故この今になっておびえなくてはならないのかと、私は思った。

ニーナは私からの電話を待っていたように起きていた。私は井村に伝えたと同じことだけを伝えた。

「さっきAPの記者から、彼が射たれたとだけ報告があったの。でも、彼は本当に射たれて死んだの」

「大宮はそういつて来ました。間近から頭に一発。血が溢れて流れ、即死だったのではないかと」

何かを一人で判じようとするように黙ったまま間を置き、やがて、

「間近から頭に一発なら、駄目でしょうね」

ひっそりと、自分にいい聞かすようにニーナはいった。

更に暫くし、

「ありがとう。その他には」

遠くだが、はっきりとある意志を感じさせる声で彼女はいった。

「いや、ただ残念だという以外に、何もないよ」

「ありがとう。あなたが最初に知らせてくれたことに、エディも感謝しているでしょう」

二人は尚何かを確か合うように黙ったまま待ち合い、やがて電話は向うから切れた。

その後、沈黙の余韻の中で、明るく晴れ上がった高原の午後、木立を鳴らす爽やかな風の渡るはるか彼方に、自分がたった今寡婦となったことを知らず電話を受けとった女を包む黒々とした夜があることを、信じなければならぬと私は思った。

また電話が鳴った。家内がとって名乗り、突然緊張した声で、

「おかしいわ、これ」

囁きながら素早く受話器を手渡した。

澄ました耳に、遠く海をまたいでどこかに繋がる電子の手に包まれた空間が感じられた。声がしないだけに、それは一層日頃この機材を通じて耳に慣れた間近なものとははっきりと質の違う、遠く大きな虚空を感じさせた。

確めながら家内に真似、私はもう一度ゆっくり相手へ促して見た。

それを待ち受け、それで何かを確めたように電話は海の向うで、同じように耳を澄ましていた誰かの手によって切られた。

先刻公邸の電話を立ち聞きしていた者は、さっき盗み聞きした名前が確かなものであるのをこれで認めたに違いなかった。

えたいの知れぬ熱く濃いものが体の内からこみ上げてきた。それをどう溢れさせ表わしていい

のかわからぬまま、齒ぎしりするような高ぶりの中で、私は今ようやくはつきりと、昨夜、とりつけたばかりの電話で話し合ったエドワルド・アルバが、私たちの戸惑いや懸念や怖れも省みず、まがいてもなく彼の故国に帰っていったって撃ち殺されたことを覚らされていた。

そこで彼を待ち受けていたものは、あらかじめ予知され、予告もされていた、そして充分に用意された暗殺であった。

それでも尚、彼は真っ直にそれに向って帰っていったのだった。怖れながらも、しかしもしそれが実際に自分の身に起ったならば、それもまた至福な一つの結末だと言っていたものに向って、目もそらさずに。

一九八一年　ポストン

道端に積もった雪の上に、石垣につけられた階段につながる足跡が窪みになって凍り付いている。そのなかに彼がこの街にたどりついて、ようやく巡り会えた幼い娘たちの小さな足跡が混って見えた。

五、六段上がるとすぐに玄関で、横に小さな庭のついた、一戸建ちではあるが、およそ四、五室ほどの古い木造家は、大学街の雰囲気合っているが、彼と家族が住むにはいかにも質素だった。